

# 電気電子工学実験 I 報告書



実験テーマ名： オームの法則の実験

実験実施日： 20 年 月 日

実験日環境：天候 晴れ、気温 23 °C、湿度 50%、気圧 1013 hPa

実験報告者

学籍番号: 18YYXXX	氏名: サンプル
---------------	----------

共同実験者

学籍番号

氏名


## 1. 目的

オームの法則は、電気を学ぶ上で大切となる法則の一つである。電気を扱う上で重要な要素の電流、電圧、抵抗についての法則である。電流は、電圧に比例することを測定する実験を行う。

## 2. 原理

オームの法則の法則は、1826 年にオームによって、下記の 2 つの法則性が発見された。

- ・抵抗が一定のとき、電流は電圧に比例する
- ・電圧が一定のとき、電流は抵抗に反比例する[1]

この 2 つの実験結果をまとめると、電流は電圧に比例し抵抗に反比例する。ことが分かる。  
オームの法則を式 1 に示す。

$$I = \frac{V}{R} \quad (1)$$

今回の実験では、抵抗の値は一定にし、抵抗に加える電圧を調整していく。その時の電流の変化を読み取ることで、式 1 のように、電流は電圧に比例することを確認する。

## 3. 実験方法

セメント抵抗に、直流安定化電源を接続し、オームの法則についての実験を行う。実験の接続図は図 1 に示す。実験では、ブレットボード上に図1の回路を組み、セメント抵抗  $1\ \Omega$  に対して、電圧を  $1\ \text{V}$  ずつ電圧を上げた際の電流を測定した。使用した機材の一覧を表1に示す。

実験の手順の手順を示す。

- ・図 1 の回路を結線

セメント抵抗に対して、直流安定化電源を接続し、各測定計器をつなぐ。測定計器は直流のため、極性がある。電位の高い側に、プラス極を接続する。

- ・計測機器の測定レンジを、電圧計を  $10\ \text{V}$ 、電流計を  $10\ \text{A}$  に接続
- ・配線の確認
- ・安定化電源を起動し、安定化電源の出力を上昇させる

セメント抵抗に加える電圧を可変していく。その時の電圧計、電流計の読みを記録していく。

- ・各電圧における電流値を測定

表 1: 実験に使用した機器の一覧

直流安定化電源 RD-60-12	1 台
直流電圧計 10 V レンジ Class1.0	1 台
直流電流計 10 A レンジ Class1.0	1 台
ブレットボード	1 個
セメント抵抗 1 $\Omega$ J ( $\pm 5\%$ ) 100 W	1 個

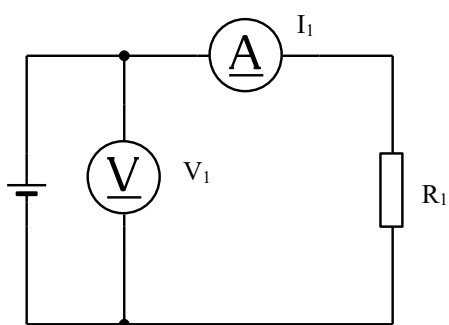


図 1: 実験回路図

#### 4. 実験結果

測定した結果を表 2 に示す。表 2 の値は、機器から読み取った最良推定値の値である。測定時は、入力として変化させたパラメーターは、電圧  $V_1$  の値である。各測定値にはばらつきがある。測定結果をグラフにしたものを図 2 に示す。

今回測定した値には、次の誤差が含まれる。

- 電圧の測定機器における測定誤差

測定機器は Class1.0 なので、 $\pm 1$  パーセントの誤差を含む。10 V レンジを使用し測定を行った。そのため、 $\pm 0.1$  V の誤差を持つ。測定結果を  $V$ 、測定値を  $V_1$  とすると式 2 のようになる。

$$V = V_1 \pm 0.1 \text{ V} \quad (2)$$

- 電流の測定機器における測定誤差

測定機器は Class1.0 なので、 $\pm 1$  パーセントの誤差を含む。10 A レンジを使用し測定を行った。そのため、 $\pm 0.1$  A の誤差を持つ。

$$I = I_1 \pm 0.1 \text{ A} \quad (3)$$

また、使用したセメント抵抗には 5% のばらつきがあるが、セメント抵抗の抵抗値は未測定。

表 2: 測定結果

電圧 $V_I$ V	電流 $I_1$ A
1.0	1.1
2.0	2.0
3.0	2.9
4.0	4.0
5.0	5.1

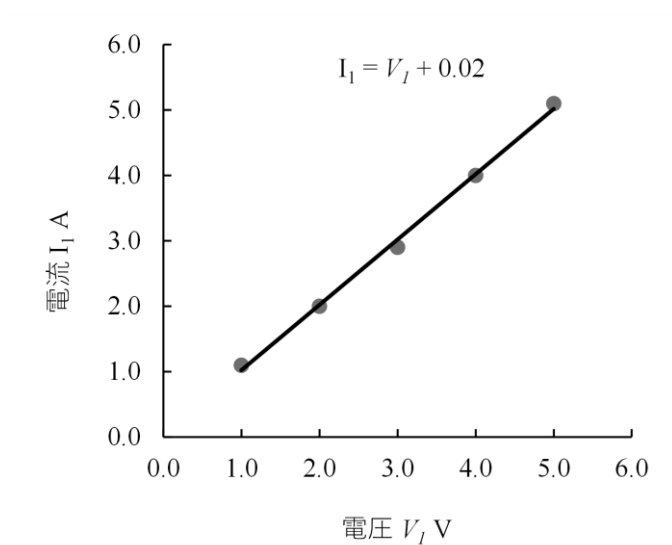


図 2: 表 1 の測定結果をグラフ化したもの

## 5. 検討事項・考察

今回の実験では、抵抗値は一定にし、電圧を変化させたときの電流の値の測定を行った。実験の結果は、式 1 より、電圧を変更させることで、電流は電圧に比例する結果が想定された。

測定の結果、図 2 のグラフの直線近似式  $I_1 = V_1 \pm 0.02 \text{ A}$  から、電流は電圧に比例することを確認した。また、測定点における電流値は、電圧に比例した値から、最大で+0.1 A、最小で-0.1 A ばらついた。これは測定計器の誤差の範囲に収まっている。このことから、測定に使用したセメント抵抗は、誤差 5%のものをを用いて実験を行ったが、1  $\Omega$  に近い値であったことが推測される。

次回からは、測定対象に対しても、値の測定を行うことで、より真値に近い測定を行う。

## 参考文献

- [1] 宇都宮,高橋,和泉「電気基礎(上)」2006 年 コロナ社 ISBN 4-339-08715-7